牧口常三郎先生と『人生地理学』

― その新たなる展開 ―

斎　藤　　毅

ご紹介いただきました、斎藤です。今日は、牧口常三郎先生とその著書『人生地理学』との関わりについて、さらには、地理学というものがどのような意味を持っているのかを中心に、お話ししたいと思います。

一般に牧口先生は、創価教育学会の創立者としては、よく知られていますが、地理学者や地理教育の専門的な研究者であったことは案外、知られていません。実際には、生涯のかなりの部分を地理教育の実践、あるいは、その理論化に費やされています。そして、そのことが今、改めて注目されているのではないでしょうか。むしろ、注目すべきではないかと思っています。

「人生地理学」との出あい

私と『人生地理学』との出あいは、かなり偶然でした。大学院を出てから、私が最初に赴任したのが鹿児島大学です。学生の皆さんの中にも鹿児島県のご出身の方がいらっしゃるかと思いますが、鹿児島県には非常にたくさんの島があります。沖縄県も多いですが、鹿児島県は九州地方で長崎県に次いで島の多い県です。

私は、学生時代から島が好きでした。大学に赴任してからは、地理学教室の学生諸君と共に鹿児島のトカラ列島などでフィールドワークを行い、学び、且つ楽しんだものです。最初は、経済地理学を中心にした手法で研究していたのですが、島には伝統文化があります。都市ではあまり見られないような、島独特の伝統文化、あるいは言い伝えといったものが、たくさん残っています。私は、やがて島の伝統文化への関心を強めていきました。

当時、地理学界では「文化」に対して、あまり関心がありませんでした。私は、地理学でも「文化」に関心を持つべきではないかと思い、「文化地理学」というような領域を考えてみたのです。この領域を考えるにあたって、地理学から少し外れた隣接諸科学について研究する必要がありました。例えば、日本民俗学や、当時、はやりだした文化人類学といった領域などを少し研究し始めたのです。調べを進めると、かつて「郷土会」という柳田國男や新渡戸稲造らが中心となった

Takeshi Saito（東京学芸大学名誉教授）

本稿は、池田大作記念創価教育研究所主催の講演会（2023 年 6 月 12 日、創価大学ディスカバリーホールにて開催）における講演「牧口常三郎先生と『人生地理学』―その新たなる展開―」に加筆修正を施したものである。

研究会があって、神奈川県や山梨県の山間部などの集落を調査していたことが分かりました。

皆さんは、柳田國男や新渡戸稲造をご存じないかもしれません。新渡戸稲造は以前5000円札の肖像になった人物で、国際連盟の事務次長を務めました。「太平洋の架け橋」と呼ばれた人です。

ともあれ、その「郷土会」のメンバーの中に、牧口常三郎という名前が出てきました。この時、私は初めて「牧口常三郎とは、そのような人物なのか」と知ったのです。牧口先生の場合、創価教育学会の創始者であるということは誰でもすぐに思いつきますし、このことはよく知られています。しかしながら、牧口先生が農村の民俗調査をしていたことや、地理学者であったということについては、ほとんど知られていないのではないかと思ったのです。

牧口先生が「郷土会」のメンバーであったことを知り、研究していくうちに、やがて彼が偉大な地理学者であり、しかも『人生地理学』を著したことに気付きました。その意味で、私と牧口先生との出あいは非常に偶然であったといえます。

牧口先生は、地理教育の研究という点では「日本の草分け的存在」といっても過言ではありません。私も地理教育の研究をしていますが、牧口先生は、いわば私の尊敬する大先輩にあたる存在ともいえるでしょう。しかしながら、偉大な地理学者、あるいは地理教育の研究者としての牧口先生の足跡は、現在では意外にも、世の中ではほとんど知られていません。これは非常に残念なことです。

では、なぜ、地理学者としての牧口先生は忘れられてしまったのでしょう？　これが次の大きなテーマです。

社会科に吸収されてしまった地理科

なぜ、地理学者としての牧口先生は忘れられたのか。それは一種の謎でもあり、追求しなければならない問題です。それを知るためには、戦前の教育事情、あるいは太平洋戦争直後の占領軍の教育政策などと関連づけて考えていく必要があります。今から七十数年以上前のことですから、ご存じの方は多くはないかと思いますが、占領軍の教育政策に注目していただきたいのです。

戦前の学校教育の中で、地理科、あるいは歴史科というのは、現在の社会科や理科と同じように、一つの独立した教科でした。現在でも、ドイツやフランス、ポルトガル、スペインなどのヨーロッパの国々では、地理科や歴史科というのは、当然ながら独立した一つの教科です。少し意外に思うかもしれませんが、実はアメリカにも地理科があります。内容は州や学校によって随分違いますが、地理科はありますし、意外にも地理というのは重んじられているのです。このように、地理は世界的に見ても非常に大事な教科なのですが、それが日本ではいつの間にか忘れられてしまったというわけです。

それには、実はGHQ（General Headquarters、連合国軍総司令部）の占領政策が関わっています。GHQは占領政策の一つとして「地理」と「歴史」の授業を禁止しました。その代わりとして、当時、アメリカで実験的に行われていた社会科の中でやってみようではないか、ということになったのです。こうして、いつの間にか地理と歴史が社会科として、何となく行われるという状況がつく

られていきました。皆さんも、「地理というと何となく社会科か」とか、「地理・歴史というと社会科か」というような結びつきや連想が働くのではないでしょうか。しかし、戦前の日本は、地理科や歴史科という、それぞれ一つの独立した教科であったことを、十分にご承知いただきたいのです。

皆さんは、歴史というとすぐにイメージが湧くでしょう。では、「地理とは何か」「地理学とは何か」と問われた時に、すぐにイメージが浮かぶでしょうか。イメージが湧けば問題ありませんが、湧かない人がかなり多いのではないかと思います。例えば、小学校や中学校の社会科地理の場合には、単に地名を覚えるとか、その土地の産物を覚えるとか、とかく暗記科目のイメージをお持ちではないでしょうか。

歴史と比べると、地理は一般的なイメージが非常に乏しい。あるいは、一般的なイメージが実際の地理とは非常に異なっていたり、想像しにくかったりするといえるかと思います。牧口先生も、地理教育に実際に当たっておられながら、やはり「地理とは何か」ということに随分、悩まれました。『創価教育学体系』の中で「郷土教育」の必要性は論じられていますが、「地理とは何か」ということに明確な説明はありません。

地理教育への強い思い

牧口先生が創価教育学会を創られたのは、人生の晩年に近いのですが、それまで何をなさっていたのか――。＜創価教育学会の創立は 1930 年、牧口は 1944 年に逝去＞

実は、北海道や後には東京で小学校の先生をされていました。それが、いわば人生の社会的な出発点になるわけです。ただし、小学校の先生でも、特に地理には非常に関心が高く、地理教育には大きな期待を持っていました。そして、地理を本格的に教えたいという気持ちが強かったのでしょう。当時、小学校の先生の中でも、中等学校などで地理や数学といった、ある一つの領域をより専門的に教えたいという人たちがたくさんいました。そのためには文部省中等学校教員検定試験に合格しなければなりませんでした。牧口先生は 25 歳（1896 年、明治 29 年）の時、非常に難関だった、この試験の地理地誌科に挑戦され、見事に合格されました。

合格後、現在の北海道教育大学の准教授に当たる、北海道尋常師範学校の助教諭になられました。同時に、その付属小学校の訓導――今でいう教諭として、師範学校に籍を置きながら付属の小学校で教壇に立つという“二刀流”の生活をされていたのです。しかし、それは長く続きませんでした。北海道師範学校で学園紛争が起きたのです。学園紛争といっても、1960 年代に東京大学などで起きたような思想的な学園紛争とは違い、一種の学生同士の争いですが、それによって牧口先生は師範学校を退任されました。その後、東京に出て出版社に移られ、32 歳（1903 年、明治 36 年）の時に『人生地理学』を出版されたのです。

志賀重昂のお墨付き

牧口先生は、北海道では地理教育の専門家として広く知られていたでしょうが、東京に出てく

ると、それほど知られてはいません。そこで出版に先立ち、当時、高名だった志賀重昂の助言を受けます。志賀重昂とは『日本風景論』を書いた人です。当時、在野の地理学者として非常に有名で、『日本風景論』は今で言うところのベストセラーになりました。この本は岩波文庫などにも入っているので、いつでも読むことができます。牧口先生は、このような人物に『人生地理学』の序文を書いてもらったのです。

ちなみに、なぜ『日本風景論』がベストセラーになったかというと、これには当時の社会的な背景がありました。この本の主張する最大の目的であり、その中心主題は「日本は美しい風景の国である」ということです。日本の風景について、ただ美しいと述べるのではなく、「コニーデ火山がどうだ」とか、「渓谷がどうだ」とかというように、具体的な地理学的背景や説明をもって、日本の風景は美しいと訴えたのです。

皆さんは、世界で一番美しい風景の国というと、どこを思い出すでしょうか。

美しい風景の国というのは、時代によっても違いますし、人によっても異なります。多くの人は、何となくスイスなどを思い出すかもしれません。ただ、スイスが美しいとされたのは英国の産業革命後の話で、それまではヨハンナ・シュピリの『アルプスの少女ハイジ』にも出てくるように、貧しい山の国のイメージでした。

牧口先生が『人生地理学』を書かれる頃、あるいは志賀重昂が『日本風景論』を出版した頃の、日本における世界で美しい国というのは、実は清国でした。現在の中華人民共和国です。なぜ、清国がそれほど美しいとされていたのでしょう。それは、皆さんのお宅にもあるような、床の間の掛け軸に明国や清国製のものがあったからです。例えば、水墨画家の牧谿（もっけい）という人は、湖水地帯の神秘的な風景を描き、日本人に非常に人気がありました。また、最もポピュラーなものは、おそらくカルスト地形かと思われる、タケノコを連ねたような山のある南中国の風景です。日本には、こうした床の間仕込みの中国の風景観があり、世界で一番美しい国は中国であると思っていたのです。しかし、そうではなく、実は日本にも非常に美しい所があり、むしろ日本は世界でも美しい国の一つなのだと、地理学的な裏付けをもって書かれたのが『日本風景論』なのです。

日本は当時、清国と戦争をしていました。日清戦争です。そのため、ナショナリズムが非常に高まっていました。戦争の相手国が世界で一番美しい国であり、日本が美しくないというのは、どうも面白くない。その流れにうまく乗ったのが『日本風景論』だったのです。

牧口先生は、ベストセラーになった『日本風景論』の著者である志賀重昂のところに行き、序文をお願いします。志賀の序文を得て、『人生地理学』は世間から大評判を受けることになります。事実、『日本風景論』とともに、牧口先生の『人生地理学』は改訂に次ぐ改訂、増刷に次ぐ増刷で、43歳（1914年、大正3年）の時には第11版を出すのです。一つの本が「11」もの版を重ねるというのは大変なことです。私なんかは、せいぜい第2版が出たくらいで喜んでいますが(笑)。『人生地理学』は大好評を博し、俗にいえば売れに売れた、まさにベストセラーになりました。

忘れられた牧口先生の地理教育の研究成果

『人生地理学』が非常に売れた原因の一つに、文部省中等学校教員検定試験を受ける小学校の教員の需要に応えたことがあります。牧口先生ご自身がその一人だったように、小学校の教員で中等学校教員検定試験を受ける人はたくさんいました。この試験の地理科を受ける人にとって『人生地理学』は必読の書となったのです。

牧口先生は東京に出てきてから、文部省で地理教科書の編纂もされながら、同時に小学校の校長も歴任されています。しかし、常に忘れなかったのは地理教育への関心でした。その結果として、『教授の統合中心としての郷土科研究』や『地理教授の方法及内容の研究』なども出版されています。それほどまでの地理学者であると同時に、地理教育の熱心な研究者でありながら、戦後は忘れられてしまったのは非常に不思議なことです。

なぜ忘れられてしまったのかというと、先ほど述べたように、終戦直後の GHQ の占領政策が要因です。いろいろな見方がありますが、私は、GHQ の日本占領政策は世界的に見ると、かなり紳士的なほうだと思います。しかし、紳士的であっても教育政策に口出しをしている。特に学校教育では、マッカーサー司令官率いる GHQ の命令によって、地理と歴史の授業が禁止されました。当時の歴史は皇国史観、地理も大東亜共栄圏が中心でしたから、仕方ないことです。禁止された地理と歴史は大幅に書き替えられて、当時、アメリカで実験的に行われていた社会科というものに統合されました。

この統合は、地理にとって非常に不幸なことでした。なぜかというと、地理学、あるいは地理教育の本来の体系が失われ、非常に大きなマイナスをもたらしたからです。地理学では自然と人間生活との関係、すなわち、環境が非常に重視されますが、その環境という概念が社会科では非常に薄くなり、具体性が乏しくなってしまいます。これは、地理学にとって致命的な問題です。さらに、あろうことか、文部省はその後、ゆとり教育として高等学校における日本史と地理を選択制にしました。つまり、高校生は日本史か地理か、どちらか好きな方を選択できるということです。地理と日本史のどちらかで良いとなると、何となく日本史を取る人が多いでしょう。両方を必修にした一部の気骨ある高校もあったようですが、多くの高校は選択制にしてしまいました。

話は変わりますが、日本の地理学界には戦後から 20 世紀末に至るまで、地理教育の研究というのはプロを目指すジオグラファー（地理学者）がすべきものではないという風潮がありました。私が大学院生の頃は、「地理教育は研究に行き詰まった者がやるもの」とまで言われました（笑）。そのため、少なくとも大学院で地理学を専攻した学生は、地理教育というものを研究テーマにするのを避けたものです。その代わり、経済地理学や都市地理学などに人気がありました。私は漁村に非常に関心があったので、漁業地理学の研究を進めたものですが、いずれにしても、地理教育を軽視する少し奇妙な風潮があったのです。このようなことが重なり、戦前は非常に多くの人に支持された『人生地理学』は戦後の学制改革が大きく災いし、忘れられてしまいました。しかも、大事なことは、それがごく最近まで続いてきたということです。これも非常に不思議です。

『人生地理学』の構成

ここからは、牧口先生の地理学の方法論を中心にお話ししたいと思います。この大学の図書館にもあると思いますし、ご覧になった方もいらっしゃると思いますが、『人生地理学』というのは1000ページくらいある分厚い本です。大著なので、あまり気楽に読める本ではありません。内容は4編から成り立ち、系統地理学の方法論で書かれています。

ところで、この『人生地理学』という耳慣れない書名に何か違和感はありませんか。「人生地理学」という言葉を初めて聞いたという人も多いかもしれません。

内容的には一種の系統地理学なのですが、そもそも、牧口先生は新しい言葉を創る才能をお持ちです。「人生地理学」も、その一つかもしれません。「人生地理学」というのは、実は「人生と地理学」というように、間に「と」を入れると非常に分かりやすくなります。書かれている内容も、まさに「人生と地理学」について、です。

日本語の「と」という助詞は、いささかややこしい。海外の人に日本語を教える際、かなり苦労するのではないかと思われるほどです。例えば、「山と海」や「赤と白」のように使った場合には、対置の関係で考えます。しかし、「花とミツバチ」のような場合には、「花とミツバチとの関わり」となるでしょう。すなわち、同じ「と」であっても、異なる意味で捉えることができるのです。「人生地理学」は、もちろん「人生」と「地理学」との関わりとなります。

さて、『人生地理学』の第1編には、「人類の生活処（しょ）としての地」という題が付いています。先ほど述べましたように、牧口先生は独特な言葉を創ります。正確な発音は私もよく知りませんし、「人類の生活処（ところ）」といっても良いと思いますが、ここでは敢えて「しょ」と言います。第1編では、日月および星、地球、島嶼、半島という具合に、いろいろな地形が出てきます。つまり、地形と人間生活の関係を述べたのが第1編です。

第2編は「地人相関の媒介としての自然」。「地人相関」とは大地と人類との関係のことで、大地は環境と同意でしょう。この「地人相関」という言葉は当時、はやった言葉の一つです。ここでは、岩石、大気、気候、それから植物などが出てきます。

第3編は、「地球を舞台としての人類生活現象」です。ここでは、社会の分業生活地論、産業地論、人情風俗地論、文明地論が説かれています。この「社会の分業生活地論」や「産業地論」もまた、牧口先生独自の言葉です。ここでは、当時としては一般的には地理学に含まれなかった「文化」に光を当てており、文化地理学に近い独特の内容といえます。

そして、最後の第4編が「地理学総論」です。地理学の概念や発達史はもちろん、「人生地理学の科学的位置」などがあります。

『人生地理学』の構成には、実は先例があります。ドイツの哲学者カントの著作です。彼は、哲学を中心にいろいろな書物を残していますが、地理の本も書いています。案外、知られていませんが、その本が『自然地理学』です。内容的には大きく異なりますが、『人生地理学』の構成は、この『自然地理学』とよく似ています。これが偶然の一致なのか、それとも牧口先生がカントの『自然地理学』を読まれた結果なのかは分かりません。

そもそも、『自然地理学』は「大学の公開講座の速記録」とされるもので、聴講者がカントに無断で出版し、後でトラブルが起きたといわれています。そのため、カントが書いたといえば書いた、書いていないといえば書いていない、という微妙なものなのです。彼の原書というのは、ご存じの方も多いと思いますが、やたらと文章が長く、読みにくい。しかし、『自然地理学』は速記録ですから、他の難しいカントの原書とは違って読みやすい。そのため、カントの書物の中では一番易しいといわれる書物です。『自然地理学』は、今では『カント全集』（理想社）の第15巻として和訳もありますが、カントの研究者、あるいは哲学の研究者でもめったに読まない本ではないか、と私は思っています。＜岩波書店の『カント全集』では『自然地理学』は第16巻に所収＞

ともあれ、『人生地理学』の表題の通り、この本では人生との関わりから自然、あるいは社会現象を見ていくという、牧口先生の姿勢が貫かれています。その意味で、「人生地理学」を「人生と地理学」として捉えると、牧口先生が伝えたい意味が分かりやすくなります。

「科学の目」と「伝統文化の目」で自然現象を捉える

『人生地理学』の内容について、もう少し具体的にお話ししたいと思います。

第１編の第１章で、「日月および星」というものが出てきます。ここでは、国号を日本としたことや、国旗を日の丸としていることなどを挙げ、「日本人が、一種特別の思想をもって太陽と交渉する」と述べられています。確かに、その通りです。また、第６章の「山岳および渓谷」では、褶曲山脈をはじめ、山地のいろいろな形を述べていきます。その中で、雪を頂いた山は、さらに美しいということが書かれている（「さらに秀麗を添うるものは、雪の冠したるなり」）。そのうえ、地理の教科書ともいえるこの本の中には、山部赤人の歌が出てきます。「田子の浦ゆ うち出て見れば 真白にぞ 富士の高峯に 雪はふりける」という和歌が引用されているのです。単にコニーデ型の火山と言うのではなく、日本人の感性、あるいは「伝統文化の目」を通した見方を改めて示しているのです。

第２編の第17章では、植物と人生の関係について論じられています（「植物の人生に対する精神的方面」）。ここでも古歌が引用されているのですが、例えば、僧正遍昭の「はちす葉の 濁りにしまぬ 心もて なにかは露を 玉とあざむく」という、蓮にまつわる歌が出てきます。蓮は泥沼の中から芽を出し、きれいな花を咲かせます。葉もきれいで、その葉の中に雨粒が入るとコロコロと転がります。清い心を持っているはずなのに、その水玉を、まるで宝石のように見る人をだますのは何としたことか、と歌った和歌です。ご承知のように、蓮というのは仏教では特別な花で、日蓮上人の「蓮（れん）」は、蓮（はす）のことです。

また、僧正遍昭についてはご存じの方も多いでしょう。百人一首に「天つ風 雲の通ひ路 吹き閉ぢよ をとめの姿 しばしとどめむ」という歌が出てくるからです。このように、自然現象を「科学の目」と同時に、「人生の目」や「伝統文化の目」でもって見ておられる。ここが非常に大事な点です。

ところで、1970年代に中国系アメリカ人のイーフー・トゥアン（Yi-Fu Tuan、段義孚、1930―2022）という地理学者が「トポフィリア」という概念を提唱しました。「トポ」というのはギリシア語で土地や場所を意味し、「フィリア」は愛するという意味があります。つまり、人間は地名というものを、ただぼんやりと聞くのではなく、時には、ある感情を引き出すような地名もあるということです。このような考え方をイーフー・トゥアンが出した時、トポフィリアは「人文主義的地理学」と呼ばれました。人文地理学ではなく、人文主義的地理学です。しかし、あまりピンとこないでしょう。私が分かりやすいと思う、もう一つの訳は「間主観的地理学」です。例えば、故郷の地名には、他の地名と比べると、何となく別の思いが湧くでしょう。有名な「ふるさとは遠きにありて思ふもの　そして悲しくうたふもの」という室生犀星の詩があります。このように、故郷には特別な思いがこもっていることを、彼はトポフィリアという概念で捉えていったのです。だから、日本人が「富士山を見て美しいな」「何か神々しいな」と思うことは、まさにトポフィリアなのです。そして、このトポフィリアが有名になる、さらに100年以上も前に、牧口先生はトポフィリアと同じことを訴えておられた。このことは、先に紹介した蓮の葉や富士山の話からも分かると思います。この点について、私の畏友の一人である竹内啓一氏（故人、日本地理学会元会長）も強調しています。

イーフー・トゥアンのトポフィリア、間主観的地理学あるいは人文主義的地理学の考え方で重要なことは、伝統文化をどう考えるかということです。伝統文化というのは、ある意味で主観です。日本のかなり多くの人は、富士山を素晴らしいと感じるでしょう。このように伝統文化として富士山を美しいと考えるのは、単なる一人の主観ではなく、共同主観という言葉で示すことができます。すなわち、物理的には単なるマグマの集合体にすぎない富士山を、美しい山だとか、霊峰・富士などと捉えることが、日本人の共同主観、それは伝統文化と言い換えることができます。

「伝統文化の目」で自然現象を見ていた牧口先生は、「地理学とは何か」や「地理学は科学なりや」ということに悩まれました。明確な答えが出ないうちに、日蓮上人の仏法に帰依され、その後、創価教育学会を設立されます。しかし、個人的には、この「地理学とは何か」ということに悩み続けられたことも知っておいていただきたいのです。

とはいえ、地理学とは学問であり、哲学ですから、科学であるか、そうでないかということは、あまり神経質に考える必要はないとも思います。戦後、マルキシズムが非常に盛んだった頃、いわゆる唯物史観が流行しました。そして、科学的社会主義が声高に叫ばれたのです。つまり、マルクスの資本論をいわば一種の聖書にしてしまった。しかし、現実には権力論で破綻し、覇権主義だけが残ったということになるかと思います。

そのため、歴史学では、それが科学であるかどうかよりも、考証が非常に大事になります。古文書そのものが本物であるかどうかの吟味とともに、書いてあることが本当なのかということを吟味します。系統地理学でも、論を組み立てる際にはデータの信憑性を考証することが大切になります。地理学は地誌が中心とよく言われますが、地誌とは史学でいう時代史に相当します。江戸時代史や戦後史といった時代史に相当するので、資料の選択とともに、吟味という作業は非常

に重要です。一方、地域を体験して書かれたものには、例えば、ゲーテの『イタリア紀行』のような紀行文があります。あるいは音楽でいうと、スメタナの交響詩「モルダウ」は一つの地誌のようなものです。このように、学問的には地理学で地誌または地域研究と呼ばれるものには考証が大切ですが、文学や音楽の場合にはそれよりも、その人の持つ鋭い感性が何より大切になります。また、地誌には資料の考証は必要であっても、科学であるかどうかを神経質に考える必要はありません。

一方、今後、地理教育研究に期待されるものは、牧口先生が早くから示された文化地理学的な問題、あるいは間主観的地理学を、どのように教育に取り入れていくかということです。これが、これからの地理教育論の展開に非常に大事なものだと思います。そして、先ほど述べた共同主観である「世界の多様な文化」の相互の許容と、さらには許容を目指すような地理教育論の構築が大事になっていくと思います。

日蓮思想の３点

私は、日蓮上人は宗教者というよりも偉大な哲学者だと思います。立正大学の久保田正文（しょうぶん）さんも「日蓮は哲学者ではないか」と言っています。岩波文庫に『日蓮文集』があります。立正安国論、開目抄、観心本尊抄の三つの書物と、弟子や門人にあてた手紙が収められているのですが、この本をひもとくと、日蓮は単なる宗教者ではなく、偉大な哲学者でもあったということが理解できます。

日蓮の思想は、大きく三つに分けられるでしょう。まず、一番の基本であり、絶対に必要なものとして「現世の肯定」があります。法然をはじめ他の宗教者とは少し異なります。現世とは、現代世界のことです。現代世界を肯定するためには、現代世界を知らなければなりません。ですから、世界を知る地理学が不可欠です。現代の世界に生きればこそ、現世の肯定ができますし、あるいは現世の肯定をすればこそ、現代に生きていくということを改めて感じるのではないでしょうか。

「現世の肯定」に次ぐ２番目に大事なことは、「自己の確立」ということです。例えば、ただ神様、仏様の命令に従って何かをしたり、単にお仕えしたり、というような気持ちではなく、自己を確立する。つまり、自分の行動に全責任を持つということです。自我の確立ともいえます。そして、３番目は「慈悲」です。ここで言う慈悲とは、単に人に対して恵みを施すことではなく、世界や社会の人々と連帯し、結びつき、行動していくことです。しかも、それは先ほど述べた、確立した自己に基づいて行うことが前提です。ただ単に世界の人々と仲良くしようというのではなく、まず、確立した自己を基盤に世界の人々と連帯し、平和な、よりよい世界を築いていくことが、３番目の非常に大事な思想になります。

学校教育における地理教育の目的

次のテーマは、牧口先生が繰り返し研究された地理教育の目的について、です。

牧口先生は、東京に移られてからも地理教育の実践を重ねました。その大切さを強調され、もちろん試行錯誤も繰り返されました。そして特に、「郷土教育」を非常に力説されました。現在では「郷土」というものが遠くなってしまった人も少なくありませんが、社会科で扱う「身近な地域」が一つの名残かもしれません。一方、牧口先生は「地理学とは何か」「学校教育における地理学の目的とは何か」ということについては随分、悩まれたようです。それは結局、創価教育論として発展的に実現されたことになるのかもしれませんが、この点については『創価教育学体系』第４巻にある教科構造論の中で述べられています。

牧口先生は「郷土」というものに大きな関心を持たれ、「郷土」について探究し続け、発展的に考えていきます。ただ、郷土のことをつまみ食いするのではなく、それらを体系的に考えていきました。これは一種の地誌、あるいは地誌構成論となります。

それでは、学校教育における地理教育の目的は何でしょうか。これは、非常に大事な問題です。皆さんは、どのようにお考えになりますか。それは世界観と関連します。世界観というのは、世界をどう見るかということであり、物事の考え方の基本です。最近では、音楽などで「世界観が出ている」といった使い方をしますが、これとは異なる意味です。

現在、私たち人類が共有している世界観とは一体、何でしょう。皆さんも既にお持ちですし、学校も必死になって、それを教えてきているはずです。答えは、科学的世界観です。例えば、「雨はどうして降るのだろうか」といったことを、私たちは科学的に教わりました。こうした科学的世界観は全人類が皆、共有している世界観です。同じ世界観を共有しているからこそ、最近よく話題になるSDGs（Sustainable Development Goals、持続可能な開発目標）といった取り組みもできます。このように、義務教育や学校教育の目的の一つは、子どもが科学的世界観を確立するための支援といえます。その基礎となる世界像を示すものが地球儀であり、世界地図です。そして、それらをダイナミックに動かしていくものが、地理学ということになるわけです。

人類構造のダイナミズムというものは、要するに文化の諸構造ということになります。ここで大きな問題になるのは、科学は日進月歩で進化するということ。皆さんは、これを良いことだと思いますか。それとも悪いことだと思いますか。また、それはなぜか、と考えてみてください。最近では、チャットGPTなど生成AIが出てきましたが、とにかく科学は日々進歩します。それは良いことか悪いことかを判断する前に、人間は、実は科学的世界観だけでは生きてはいけない存在です。なぜなら、科学的世界観は未完成であるからです。未完成であればこそ、日々進歩するということを、ぜひ知っておいてください。

この未完成な世界観を補う必要がありますが、それが実は宗教であり、伝統文化です。人間構造のダイナミズムは、まさに宗教や伝統文化によって補われています。例えば、特定の宗教を持たない平均的な日本人でも、ご先祖様を大切にする祖霊崇拝の考え方を持っています。また、アニミズムもあります。アニミズムとは、児童心理学を勉強した人は分かるかと思いますが、要するに生物や無生物への感情移入ということです。例えば、日本には八百万（やおよろず）の神があるといいます。井戸には井戸神様がいるし、トイレにも神様がいます。私も子どもの頃には、お正月のお供え餅

をトイレにお供えしたものです。これがアニミズムです。アニミズムは子どもだけのものかというと、そうではなく、大人もずっと持っています。例えば、正月の初日の出に対して、何となく神秘的なものを感じます。また、登山をする人は、いわゆる「ご来光」というものに非常に憧れます。夜中のまだ暗いうちから山へ登り始めて、山の頂上で昇ってくる太陽を眺めると神聖な気持ちになるからです。このように、平均的な日本人は、祖霊崇拝とアニミズムの二つを持っています。そうした日本文化のフィルターを通して世界を見ていくことが、牧口先生の『人生地理学』の一つの基本かと思います。つまり、日本人は科学的世界観とともに、祖霊崇拝やアニミズムのフィルターを通して、山や川、植物といった自然環境を見ていることになります。

創価大学に地理学部の開設を期待

講演の結びにあたり、創価大学へのメッセージをお伝えしたい。

牧口先生は、地理教育に多くの情熱を注がれました。そして、池田先生は、牧口先生、戸田先生の創価教育を土台とした、この素晴らしい創価大学を創設されました。私は、この大学に、いつの日にか、日本一の地理学教室、あるいは地理学部というものを設置してほしいと思うのです。そして、地理教育論の専門的な教授を世界各国から招聘すべきだと思います。このことは、牧口先生の遺志を受け継ぐことにもなると信じます。

さらに、日蓮の哲学思想を取り入れた、構造的な地理教育論が確立されることを願っています。先ほど述べたように、日蓮の哲学思想は現世、すなわち現代世界の肯定、自己の確立、そして、それらを前提としたうえでの慈悲がポイントになります。その実践は、世界の人々や社会の多様な文化を認め合い、許容するという行動論にもなります。これは牧口先生の基本的な考え方であり、非常に大事な視点です。

来るべき創価大学地理学部、地理学教室では、自然地理学や人文地理学、文化地理学といったものだけでなく、「郷土研究」を発展させた地域研究を取り入れてほしい。例えば、南西諸島地誌、ポリネシア地域研究、インド亜大陸研究、さらにはイスラム圏の地域研究など、地域研究のコースがあって良いのではないでしょうか。同じ地域を研究するために、世界中からさまざまな視点をもった研究者が集まり、現地調査を行えば、「郷土研究」に力を注がれた牧口先生も喜ばれるとともに、世界的に特色ある学部、学科になると思います。

こうした地理教育を専門的に実践することによって、現代世界の諸地域が抱える幾多の問題に真正面から挑戦するたくさんの若者が育つ、そんな創価大学ができるのではないかと思うのです。それは、日蓮の主張した「慈悲」の実現にもつながるでしょう。さらには、SGI（創価学会インタナショナル）に新しい生命が加わるのではないかと思うのです。

最後に、牧口先生の夢の実現と仏法哲学の発展を願って、この講演を終わりたいと思います。ありがとうございました。